

P. デッサウとB. ブレヒトの合唱曲《ドイツ・ミゼレーレ》研究

——テキストと音楽的表現の関係をめぐって——

和田 ちはる

パウル・デッサウとベルトルト・ブレヒトによる合唱作品《ドイツ・ミゼレーレ》(1943-47)は20世紀を代表する反ファシズム作品のひとつとして知られるが、これまであまり上演の機会に恵まれず、また研究対象として取り上げられる機会も限られたものであった。しかしこれは彼らの最初の実質的な共同制作作品であり、デッサウの創作活動全体の中でも重要な意味を持っている。

この作品の制作はデッサウの発案によって始まったが、成立過程には、通常の歌曲制作における詩人の役割を超えたブレヒトの大きな関与があった。待望だったこの詩人と仕事することはデッサウにとって刺激的で、彼はそこでブレヒトから多くのことを学んだという。しかし多くの書き直しを含む手稿譜や彼らの言説から総合的に判断すると、この作品の制作が、シェーンベルクの音楽から大きな影響を受けてきた彼を、ときにジレンマに陥れてもいたことがわかる。

先行研究では、この作品はブレヒトの美学に沿ったかたちで解釈されることが多かった。ここではテキストの全体的な構造は確かに音楽の中に論理的に引き継がれており、音楽が内容に積極的に関わってゆくことによって、ブレヒトが目指した多層的な異化のプロセスが生み出されていることは間違いない。しかし実際には、その関与の仕方にはさまざまなレベルがあり、中には現実的な影響力を追求するブレヒトの方向性とは一致しないわかりにくいメッセージや、音楽内部の構成原理への愛着に由来すると判断せざるを得ないような箇所もある。本論文ではこのような点に着目した。ここではこの作品を理解するうえで欠くことのできない成立動機や制作過程をふまえたうえで、作品の全体的な構想と音楽的な諸要素の関連のあり方に重点を置いてこの作品を再検討し、その多面的な性格を明らかにすることを試みる。